

大学

学ぶ力を育てる

上

「文章を書く時、事実と意見は区別して」。6月中旬、愛媛大工学部の1年生80人の前で、教育・学生支援機構の佐藤浩章准教授がレポートの書き方を教えていた。必修科目「新入生セミナー」の1コマだ。

「『ですます』ではなく『だ・である調』で」「『気がする』『かもしれない』などあいまいな主観的表現はだめ」。文章の基本を丁寧に指導する授業に、ある男子学生は「高校では教わらなかった。きちんとした論文が書けよう」とうなずいた。

昔の大学生なら当然知っていたことを知らない学生が目立つ。黒板に書いた内容が読み取れない、文章に話し言葉が交じる、課題図書も指定して探さず方法がわからない……。

「大学は手取り足取り教える場ではない」という声もあるが、佐藤准教授は「いい加減なレポートを提出し、勉強しない学生は昔も

えて下さい」と言う。解答を必死で丸暗記している学生の姿も目にした。「答えが出るとは限らない問題に挑むのが大学なのに」と総合教育研究機構の高橋哲也教授は嘆く。

高校までの履修内容の削減などで大学の学力低下も目立つため、05年度に「質

ンフレットやホームページに取り組みを紹介する大学も多い。今年3月には、教育の方法や効果を研究し、情報交換する「初年次教育学会」も設立された。

産業界を中心に大学教育の質を厳しく問う声が高まっており、京都大の溝上慎一准教授(高等教育論)は「在学中に培う学生の力、

脱「受け身」へ初年次教育

セミナーは2006年度に始まった。▽講義の要点を簡潔にまとめる▽文献を読み、自らの考えを整理して書く▽図書館など使って資料を集める、など学ぶ技術が中心。生活時間の管理、口頭発表の技法なども教える。

こうした授業は「初年次

いた。大学は、放任して容易に卒業証書を渡すか、中退していくのを見て見ぬぶりしてきたのではないかと語る。

大阪府立大の理系学部で数学を担当する教員は1年生の「異変」に気づいた。質問に来た学生に解き方を説明すると「答えを先に教

問受付室」を設置。教員が交代で詰めるが、解答は一切教えない。定理などを説明し、学生自身にプロセスを考えさせる。

文部科学省によると、06年度の時点で、大学院大を除く国公私立大710校のうち、71%に当たる501校が初年次教育を導入。パ

全入時代を迎え、大学で学ぶ技術や基礎知識、意欲が不足する学生への対応が求められている。学

ぶ力を育てる取り組みを追う。

(読売新聞 2008年(平成20年)7月18日掲載)

この記事は、読売新聞社の許諾を得て転載しています。

この記事について無断で複製、送信、出版、頒布、翻訳、翻案等著作権を侵害する一切の行為を禁止する。

読売新聞社の著作物について、<http://www.yomiuri.co.jp/policy/copyright/>